

人は小麦にて生かされる — 麦粥にみる、アラブ人キリスト教徒のアイデンティティの表象 —

菅瀬 晶子

はじめに

東地中海地域のアラブ人人口のうち、ギリシャ正教、カトリック、プロテスタントをあわせても、キリスト教徒人口はわずか1割に満たない。しかしながらそれゆえに、彼らはキリスト教徒としての自覚を強く持ち、日常生活のさまざまな場面において、「キリスト教徒である自分」を表現しようとする。ギリシャ以外の東地中海地域において、多数派を占めるのはイスラームであるが、唯一ユダヤ教徒がその社会の中核を担っているイスラエルにおいては、アラブ人キリスト教徒のアイデンティティのありかたは、他の地域のそれとは異なる様相を呈している。すなわち、皆が同じアラブ人であることが前提のイスラーム社会とは異なり、イスラエルではまず、ユダヤ人とアラブ人の差異が存在する。イスラエルでキリスト教徒であると表明することは、アラブ人であるとみずから名乗るに等しい。つまり、本来別個のものであるキリスト教徒としてのアイデンティティとアラブ人としてのアイデンティティは、同じアラブ人であるムスリム以外の他者、つまりユダヤ教徒の存在を意識することによって密接に関わり、やがては同一のものとして複合してゆくのである。

ただし、イスラエルのアラブ人キリスト教徒は、ユダヤ教徒ばかりを他者として意識しているのではない。ムスリムは彼らと同じアラブ人であり、衣食住については同じ文化を共有している。そして同時に、ユダヤ教徒よりも日常的に接する機会の多い、より近い他者でもある。しかしながら、その近さゆえにムスリムと差異化をはかろうとする気持ちは、むしろユダヤ教徒に対するそれよりも強い。共有する文化に、キリスト教徒ならではの色を加え、意味づけをおこない、強く差異化をはかるのである。

この研究ノートでは、イスラエルにおけるメルキト派カトリック信徒とマロン派カトリック信徒の食文化を取り上げる。なかでも「麦粥 (qamh maslūq)」と呼ばれる食物の供しかたに注目し、そこに表象される、彼らのキリスト教徒としてのアイデンティティのありかたを記述してゆきたい。なお、ここで「キリスト教徒」と呼ぶのは、これら二

派のカトリック信徒たちである。ギリシャ正教徒やその他の宗派については、扱わない。

1. 麦粥とは

東地中海地域一帯において、小麦は主食の地位を占めている。ことにキリスト教徒にとっては、雨期の訪れとともに芽吹いて豊かな実りをもたらす小麦は復活の象徴であり、ミサにおいてキリストの肉体の象徴として扱われる聖体のパン (qurbān, qurbāna) の原料でもある。彼らにとって、小麦は他の穀物とは比較にならぬほど重要なものである。イスラエルにおいて、キリスト教徒たちはおもに北部のガリラヤ地方の農村の出身者であるが、今日農村で農業のみを生業にしている者はすくなく、ほとんどの者はハイファなどの都市部へと出稼ぎに出る。農作業—おもにオリーブと小麦の栽培—は、村に居残った者たちによってほそぼそと続けられ、農繁期には出稼ぎに出た者たちも手伝いに戻ってくる。生産量が少ないため、収穫された小麦はもっぱら自家消費にあてられ、ことにこの研究ノートで取り上げる麦粥は、基本的に自家産のものでつくられる。

さて、麦粥であるが、アラビア語の呼称である qamh maslūq を正しく日本語に訳せば、「茹でた麦」である。自家産の小麦の粒をひと晩水に浸け、その後シナモン (qirfa) とアニスシード (yanasūn) を加え、数時間かけて煮る。多くの場合、砂糖を加えて甘く味付けし、ナッツや干しブドウ、ザクロの実などを添えて、温かいまま供される (写真参照)。冬季にアラブ人の家庭を訪問すると、しばしばこの麦粥をふるまわれる。

麦粥自体は、キリスト教徒のみならずイスラーム教徒にも一般的な食べ物であり、冬季の風物詩として知られている。しかしながら、イスラーム教徒にとって、麦粥は冬に食べる菓子のひとつにすぎず、その一方でキリスト教徒にとっては、麦粥は特別な意味をそなえた食物である。それらをまとめると、以下のようになる。

その1：聖女バルバーラの日にふるまわれる菓子

キリスト教徒にとって、麦粥といえば聖女バルバーラの聖日 (12月4日) にふるまわれる菓子である。

聖女バルバーラ (al-Qadīsa Barbāra) とは、初期キリスト教の殉教者のひとりとみなされる人物であり、中東諸教会の女性聖人のなかでは、聖母マリアに次ぐ人気を誇る。四世紀ごろに小アジア、あるいはエジプトのアレキサンドリアに実在したといわれているが、伝説の域を出ていない¹⁾。裕福な家に生まれ、キリスト教に興味を示したために、実の父親によって塔に幽閉されたとされる。その後、ひそかにキリスト教に帰依し



写真 聖女バルバーラの日にあふまわられる麦粥、「バルバーラ」
麦粥の上に乗っているのは、煎りゴマとクルミ、ザクロの実である。2000年12月3日、イスラエル・ガリラヤ地方ファッスータ村にて撮影。

た彼女は塔から逃げ出すが、父親によって捕らえられ、斬首された。直後に父親は雷にうたれて焼け死んだと伝えられている。

麦粥が、なぜ彼女を記念する日にあふまわれるのか。それはバルバーラが塔から逃げ出した折に、麦畑に身を隠したことに起因している [Mansūr 1998: 115]。バルバーラの聖日が近づくと、キリスト教徒の家庭ではいっせいに麦粥がつくられる。この日の前後にあふまわれる麦粥は、聖女の名前を取り、「バルバーラ (barbāra)」と呼ばれている。

その2：葬儀ミサ後に配布される聖体

マロン派カトリック、メルキト派カトリックの葬儀は、最低四段階におよぶ。まずは死者の逝去の翌日におこなわれる葬儀ミサ、次いで死後3日、7日にもミサが挙げられる。最後におこなわれる、没後40日ミサ (Junnāz al-Arbaʿīn) がもっとも重んじられており、弔問客を呼び寄せて盛大に執りおこなわれる²⁾。

この、没後40日ミサにおいては、最後に参列者全員に、聖体がひと切れずつ配られるのがならわしとなっている。通常、聖体は小麦粉の生地少量の砂糖を加え、ムスタカ (mustaka)³⁾ で香りづけをして焼いたパンであるが、まれにこの聖体のパンにかわって、麦粥が配られることもある。筆者がこの事例を観察したのは、わずかにマロン派カトリックでの没後40日ミサただ一回であった。ただし、メルキト派カトリックの現総

大司教による儀礼概説書によれば、葬儀ミサの聖体としては、むしろ麦粥をふるまうのが本式のようなのである [Lahām 1988: 167]。パン屋に委託できる聖体とは異なり、麦粥は作るのに手間がかかるため、簡略化されたのであろう。葬儀ミサで配られる麦粥は、遺族の女性たちが協力してつくるものである。今日、聖体のパンもまた、遺族の女性たちが寄り集まって、ミサの前日に切り分けられる。一族が協力して葬儀を執りおこなうという形式だけは、受け継がれているといえるであろう。

その3：子どもに歯が生えたことを祝う菓子

以上で紹介した麦粥は、いずれもキリスト教と密接に関わっている。しかしながら、麦粥が常に宗教的な意味合いを帯びているかといえば、そうでもない。単純に、子どもの成長を祝うものとして供されることも、あるのである。

キリスト教徒には、赤ん坊に歯が生えはじめたことを祝って、親族や近隣の者に麦粥を配る慣習がある。これは、赤ん坊がもはや母親の乳だけではなく、固形物も食べられるようになったことを示すための儀式であり、赤ん坊にはかたちだけ、数粒の麦を含ませる。このときふるまわれる麦粥は「茹でた麦」でも、「バルバーラ」でもなく、「スィヌニーエ (sinuniya)」と呼ばれる。この名は、アラビア語で歯をあらわす sin に由来している。

2. 麦粥の象徴性

以上の事例から読み取れる、麦粥の象徴性は以下の通りである。

その1：死の象徴、犠牲の肉体

イスラームにおいても同様であるが、キリスト教における聖人たちの記念日は、おおむね彼らが殉教を遂げたことを祝うものである。つまり、聖女バルバーラの日にはふるまわれる麦粥とは、その呼び名「バルバーラ」が示すとおり、殉教を遂げた聖女の肉体そのものである。

キリスト教において、パンがキリストの肉、犠牲の象徴として扱われているのは、周知の事実である。麦粥は、小麦を粉にひかず、大地に蒔けば芽吹く種の状態、つまり生命を宿した姿のまま、熱湯で煮て殺してつくられる。しかも、ひと晩水に浸けて、より芽吹きやすい状態にしてから煮るのである。つまり、麦粥はパンよりもさらになまなましい、麦の死体そのものであるといえる。麦粥が死者を弔うミサにおいて、聖体として参列者に配られるのは、このような意味合いを帯びているからであろう。

その2：生の象徴

しかしながら、麦粥は死の象徴であるばかりではない。生の象徴としての一面をもそなえており、そのことを端的に示すのが、「スィヌニーエ」である。

キリスト教徒はキリストの肉としてのパンをミサで拝受し、それを食すことによって、キリストの聖霊を得る。「人はパンのみだけで生きるものではない [マタイによる福音書4.4]」とイエス・キリストは言うが、この発言ははからずも東地中海地域におけるパン、つまりその主原料である小麦の重要性を裏付けることとなった。人は小麦によって肉体を養い、キリストの肉体としての聖体のパンを受けることによって、精神的な糧を得る。人は小麦によって生かされているのである。

しかしながら、小麦とその製品は、歯がなければ食べることはできない。歯が生え、小麦を咀嚼できるようになってはじめて、乳飲み子は肉体的にも、精神的にも小麦に養われるキリスト教徒となるのである。「スィヌニーエ」は、赤ん坊が人間として、キリスト教徒として、新たな生命を授かることを祝うためにふるまわれるのである。

考察 アイデンティティの相剋、麦粥によってもたらされる親和

さて、キリスト教徒たちは一様に、食をはじめとして、自分たちの文化がイスラーム教徒のそれよりもまさっていると公言してはばからない⁴⁾。そのような折に、引きあいに出されるのはたいてい小麦を使用した料理であり⁵⁾、その最たる例は聖体のパンであり、聖体の役割をも兼ねる麦粥に他ならない。

キリスト教徒たちは誰しも、日曜ミサのたびに拝受する聖体のパンを「(聖なるものであるという以前に) どんなパンよりもおいしい」と言う。良質な小麦を使用し、砂糖を加えるためほのかに甘みのある聖体のパンは確かに美味であり、これを食することができるのはキリスト教徒の特権であると、彼らは考えている。また、麦粥はイスラーム教徒にとっては単に冬の風物詩でしかないが、キリスト教徒はこの食物に宗教的聖性を与え、死と生を繋ぐ役割を担わせている。一粒の種から芽吹き、豊かな実りをもたらし、死ぬ、つまり食物となることによって人間を生かす麦は、まさに死と生を常に循環する存在だといえる。そんな小麦を多彩な様式で食し、ふるまうキリスト教徒は、イスラーム教徒よりも豊かな精神性を有しているのだと、彼らは麦粥や聖体のパンを賛美することによって主張するのである。

また、小麦の栽培はガリラヤ地方のアラブ人農村にとって、農作業の象徴ともいえるべきものである。農業に従事する者の数は減少したが、それでも彼らの農作業は今日もなお、9月14日、15日の「十字架祭」⁶⁾を年頭とする伝統的な農業暦にのっとって進められている。これは、「十字架祭」に雨期の兆しがみえはじめるとされているためである。

雨期の訪れとともにおこなわれるのはオリーブの収穫であり、小麦の播種にほかならず、雨期の終わりとともに小麦は収穫され、農閑期に入る。つまり、小麦の栽培サイクルこそが農作業の基準であり、ガリラヤ地方のアラブ人の大半が生まれ育った、農村社会の象徴である。そして、農村への帰属意識は、キリスト教徒に限らず、イスラエルのアラブ人市民にとって、アイデンティティの根幹をなす重要なものである [菅瀬2005: 62-64]。小麦を用いる食文化を誇ることは、アラブ人農村に生まれ育った者、つまりアラブ人としてのアイデンティティを主張することにつながる。

ところが、アラブ人キリスト教徒のうち、メルキト派カトリック信徒とマロン派カトリック信徒は、ローマ・カトリック傘下に属するがために、ギリシャ正教徒よりも欧米への憧れが強い。ギリシャ正教徒やイスラーム教徒への対抗意識から、欧米により近い宗派の信徒であることを誇りとし、ときにアラブ人であると名乗ることをためらう傾向すらみられる [菅瀬2005: 132]。彼らの内面では常に、アラブ人としてのアイデンティティと、キリスト教徒としてのアイデンティティの相剋が繰り返されているのである⁷⁾。しかしながら、宗教・宗派の別を問わず、東地中海地方すべてのアラブ人に共通する食物である麦粥にキリスト教的意味あいを持たせ、それを誇ることは、すなわち彼らのなかで乖離したキリスト教徒としてのアイデンティティと、アラブ人としてのアイデンティティを結びあわせ、親和性を持たせようとする行為といえはしないだろうか。キリスト教徒たちが誇らしげに麦粥をふるまうとき、そこにはイスラーム教徒に勝る存在でありたいという、キリスト教徒としての自尊心と、彼らと同じアラブ人としてのアイデンティティを抱いていたいという渴望がこめられているのである。

引用文献

Lahām, al-Matrān Lutfī

1988 “*Madkhal ilā al-Rutab al-Litirajīya wa Rumūzhā fī al-Kanīsat al-Sharqīya*”, al-Quds al-Sharīf.

Mansūr, Johnny

1998 “*al-A’yād wa al-Mawāsīm fī al-Hadārat al-‘Arabīya*”, Haifā.

Sa’ar, Amalia

1998 ‘*carefully on the margins: Christian Palestinians in Haifa between nation and state*’, American Ethnologist, May 1998, pp. 215-239.

菅瀬 晶子

2005 「イスラエルにおけるアラブ人キリスト教徒のアイデンティティの様態 —ガリラヤ地方・メルキト派カトリック信徒の事例研究」、博士論文、総合研究大

学院大学に提出。

注

- 1) バルバーラの出身地については、小アジアとする説が一般的であるが、中東諸教会ではエジプトのコプト正教を中心に、アレキサンドリア出身説も存在する。同様の事例は、やはり絶大な人気を誇る聖ゲオルギオス (Mār Jirjis, Mār Jurīs) にもみられ、彼は小アジアではなく、パレスチナ出身である、あるいは母親がパレスチナ人であった、などの説が流布している。
- 2) その後、各遺族の意向に応じて、没後半年や一年などのミサもおこなわれることがある。
- 3) 英語名はマスティック (mastic)。ムスタカとは、ギリシャのヒオス島特産の樹木の樹脂であり、古来胃腸の妙薬として珍重されてきた。ギリシャ正教では聖体のパンの香りづけに用いられ、メルキト派と、一部のマロン派も同様の聖体を使用している。これは、メルキト派が18世紀初頭にギリシャ正教から分離し、ローマ・カトリックの傘下に入りながらも、ギリシャ正教の教義や慣習を随所にとどめているためである。
- 4) 筆者はフィールド調査の間、イスラーム教徒の主婦がしばしば、「北部の村に住むキリスト教徒たちの料理」を絶賛し、そのことばをその村出身の女性たちが誇らしげに聞いている場面を目撃した。実際、イスラーム教徒みずから、「キリスト教徒のほうが趣味がよい」と、認めてしまっているきらいがある [Sa'ar 1998: 221]。ただし、引用文献の当該箇所では述べられているのは、家具調度の趣味についてである。
- 5) 聖体のパンと麦粥のほかに、キリスト教徒の食文化のすばらしさを象徴するものは、クッベ・ナイエ (kubba ni'a) であろう。これは小麦を挽き割りにしたブルゴル (burgul) をふやかし、山羊の生挽肉と香草、香辛料、パプリカのペーストとともに練って団子状にしたものであり、キリスト教徒の多いガリラヤ地方北部の農村のもてなし料理である。クッベ・ナイエを誇ることは、新鮮な生肉を食すことのできる環境と技術、双方を誇ることに他ならない。また、復活祭のときに各家庭で作られる菓子マームール (ma'amūl) もまた、小麦を主原料としており、その形はイエスの荆冠や墓など、キリスト教的な象徴性を帯びている。イスラーム教徒にとって、マームールは犠牲際るときにふるまわれる菓子であるが、その形に特別な意味はないという。
- 6) 「十字架祭 ('Īd al-Salīb)」とは、ローマ皇帝コンスタンティヌスの母親ヘレナが、エルサレムのゴルゴタの丘に詣で、イエスが磔刑に処された十字架の木片を発見したことを祝うものである。この日に雨が降れば、その年の雨期は降雨に恵まれ、豊作になると言われており、実際この日に降雨がみられる確率が高いとという。筆者がイスラエルのハイファでこの祭を観察したのは2001年と2002年であるが、このうち2001年には、晴天にもかかわらずわずかながら、小雨がぱらついた。
- 7) メルキト派信徒の場合、この相克はより複雑である。なぜなら彼らの宗派は本来、アラブ人のための教会を築くために、ギリシャ正教会から分離独立したものであるからである。つまり、メルキト派信徒であることを名乗ることは、アラブ人としての名乗

菅瀬 晶子：人は小麦にて生かされる

りをあげることにほかならない。にもかかわらず、彼らは周辺アラブ諸国への失望や、それらの国の人口の圧倒的多数を占めるイスラームへの対抗意識から、アラブ人と自称することをためらうのである。